

新薬の開発に思う

山本 俊幸

ここ数年ずっと新薬の上市ラッシュが続いている。次々に新しい薬が登場するのは、ひと昔前からしたら考えられないほどである。その中の1つに、ステロイド配合シャンプーがある。いまはもう遠い話であるが、筆者が入局したてのころは、製薬会社のプロパー（いまでいうMR）さんが食事に連れていってくれることがたまにあった。新米は上の先生に声をかけてもらって喜んでついていくのだが、ある席でどうしたらもっと処方量が増えるか、酔いも混じってサービス精神から、パンデルシャンプー、パンデルリンスをつくればいいという話になり、その場は楽しく過ごしたが、4、5年前にデルモベート配合シャンプー製剤が発売された。さすがにそのままではまずいのか、ショートコンタクトという使用法が用いられている。このショートコンタクトというのは、アンスラリン軟膏塗布の際に昔よくやった方法である。アンスラリン軟膏は海外では製品になっているが、本邦では入手できないので、試薬を購入し0.1～1%くらいの院内製剤として調製してもらい、これを乾癬の外用薬として使用していた。刺激性があるため、外用して30分で洗い流していた。効果は高いが、非常に手間も時間もかかり一時的な色素沈着を伴うこともある。倫理委員会を通す必要も出てきたためか最近ではめっきり使われなくなった。ちなみに当時、研修医は、担当した入院患者の頭部の乾癬に対し、頭髪を五分刈りにしてもらいアンスラリンのショートコンタクト療法を試していた（効果はどうだったか忘れた）。

また、爪白癬に刷毛で塗るタイプの新しい外用剤もすでによく使われている。昔、地方の病院に勤務していたころ（そこではペキロン®という薬がよく出ていたのだが）、MRさんとの会話の中で、爪水虫がある若い女性は夏でも素足になれないという話になった。その会社は爪に外用薬を浸透させる技術をもっていたような記憶があるが、ペディキュアにして売り出せばという話となり、どうせなら色もカラフルにして、グレンジャーになぞらえ、今日の気分はペキロンレッドとか、今日はペキロンブルーとかにすれば、お洒落な薬として飛ぶように売れるよ、などと話をしていて、当時は笑って終わったのだが、ときを経て現実に近いものとなっている。今後は色を工夫すればよいと思う。こういう例をみると、処方箋で出す薬の中には医薬部外品に近いものも出てきた感を感じる。

これらは一例であるが、おそらくほかにも似たようなアイデアをおもちの先生がいるのではないと思う。必要は発明の母で、こういう薬があればいいのにとという要望が新薬の開発につながる可能性はあるし、薬以外のデバイスになると、産学連携になるのかもしれない。特許とまではいかないが、そういう柔軟なアイデアや自由な発想をその場限りで終わらせないためにも、どこかにそういうシーズを寄せる窓口があればよいのと思う。